

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団  
市民の集い開催への助成

## 報 告 書

シンポジウム「主体的に生きる選択と支援」

～住み慣れたところで最期まで自分らしく生きたい～

令和3年9月30日

みんなの保健室陽だまり

代表 服部 満生子

令和3年8月1日 助成を受けました事業が終了したので、下記の通り報告します。

### 記

#### 1. 行事の名称

シンポジウム「主体的に生きる選択と支援」  
～住み慣れたところで最期まで自分らしく生きたい～

#### 2. 実施期日及び開催場所

- (1) 実施期日 令和3年8月1日(日)13:00～16:10
- (2) 開催場所 草加アコスホール（オンライン設備なし）  
多目的スペース（21×22メートル）固定式舞台  
いす最大500席

今回は隣人との間隔を2m開け150人収容の予定で実施

#### 3. プログラム

- (1) 基調講演（13:10～13:55）  
講師；かなえるナース 前田 和哉氏
- (2) 音楽（13:55～14:10 休憩時間）

作詞：伊藤けいこ、作編曲：前川真人「何のために生まれてきたの」、「自分らしく生きること」

(3)シンポジウムとディスカッション (14:10～16:00)

- ・小児の医療的ケアの現場から 岩本 ゆり氏
- ・母親の介護を通して 佐久間 禎久 氏
- ・筋ジストロフィー自立生活への想い 桜井翔太郎 氏
- ・生活支援の立場で感じていること 半沢 真司 氏
- ・100歳まで働ける職場の運営 桑原 静 氏

4. 参加者及びその人数

参加者134人（パネラー 6人・実行メンバー28名 含む）

5. 事業の概要と成果

みんなの保健室陽だまりは、地域包括ケアシステムの根幹にある「住みなれた地域で最期まで暮らし続ける」ことの意味を具体化していくことに日常的に取り組んでいる。しかし参加者の多くは自分ごととは捉えにくく、どこか他人ごとのような感覚である。一方で認知症や体の衰えは切実に感じ不安感は強く「長生きしたく無い」「早く死にたい」等投げやりな言動さえ聞かれる。そこで主体的に生きる基盤となる意思決定について身近に感じ、その重要性に気づく機会を作りたいと考え「主体的に生きる選択と支援」をテーマに市民の集いを開催した。

積極的に生きることを選択し自立生活をしている方やその支援をしている方々に登壇いただきシンポジウム の形で在宅医療の実際や暮らしの支援の実際を紹介した。基調講演では「かなえるナース」を事業化し、人生最期の希望である「故郷に帰りたい」「温泉に入りたい」「娘の結婚式に出席し一緒にバージンロードを歩きたい」等の様々なニーズに添い支援するその様子を動画で紹介、いずれにしても本人の意思決定上に展開する支援であり、それが叶った時の本人とその家族の満足感が大きいことを強調していた。

シンポジウムでは、ALS疾患をもつ青年の積極的な生き方と自立生活の実際を車椅子で出入りできるアパート選びから具体的には話していただいた。暮らしを支援している40代の男性介護士は、その日常生活支援の実際を「甥っ子と一緒にいるようだ」と述べていたことが印象深かった。認知症の母親の介護にあたるヤングケラーの方、障害を持つお子さんの訪問看護に携わっている看護師、さらに100歳時代高齢者の生きがいづくりを支援している方等、多様な方に登壇していただき主体的に生きることの意味決定の重要性とその支援について語っていただいた。

小児の在宅医療を支えている訪問看護師が「天井を見て生きるのではなく積極的に生きることを支えたい」と述べていたことや基調講演でのかなえるナース前田氏

が語る「諦めない生き方・生きる希望を支えたい」に参加者の多くは感動し、現在の支援の実際に驚きさえ感じたようであった。(アンケート結果を添付)

#### 『成果』

新型コロナウイルスは私たちに生きることの大切さと感染症の怖さを教えた。当たり前前に暮らしてきた家族との繋がりも引き離した。この実態を誰もが体験している今「主体的に生きる選択とその支援」～住み慣れたところで最後まで自分らしく生きたい～をテーマにシンポジウムを開催できたことは意義のあることであり、参加者一人一人が自分ごととして真剣に考える機会になったことは参加者の質問や態度により掴むことができた。感染拡大の兆しが見えた時期でもあり開催に迷いもあったが、事前に100名からの参加申し込みがあり関心のたかさを窺い知ることができた。この希望者の意思決定を無駄にしたくなかった。また「共生」を意識し、病気・障害・介護・看護の現場の取り組みなど実践者に登壇していただき最新の情報も得られるようにプログラムを組んだ。そのことから会場から様々な質問があり参加者とパネラー・企画サイドが一体となったシンポジウムになったと考えている。また実施にあたっては他の団体と共催したことにより広い地域の参加者を募ることができたと考えている。

草加市長をはじめとする行政職・草加市社会福祉協議会職員が参加していたことは市民と行政職との距離感を縮める一助になったとも考えられる。このシンポジウムをきっかけに意思決定および在宅医療に関して、住民一人一人が身近な課題として具体的に深めていけるようさらに深めていきたいと考えている。

#### 6. 後援・共催団体等

共催：BABA lab

助成：公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団

後援：埼玉県、草加市、草加市社会福祉協議会

なお、今回はコロナ感染拡大に備えての感染防止対策が必要であり、その実際について以下の通り報告します。

#### 7. 感染拡大防止対策の実施と結果

感染防止対策担当者を2名置き、徹底的に取り組む。

##### (1) 参加者名簿の徹底

事前申し込み・当日参加者名簿：電話・メール連絡方法を明確に記載し即連絡できるようにした

##### (2) 検温：37.5℃以上は入場できない

##### (3) 密を避ける

通路から受付：誘導人員を置き、1m以上間隔をおき進む（誘導と立札使用）

受付：事前参加と当日参加を別

事前申し込みは○印のみ

当日参加はカードに氏名・連絡場所を記入しボックスに入れる

アクリル板使用し直接の対面を避けた

ロビー：立ち止まっての会話は禁止にした

会場：2mの間隔を開けた座席設置

舞台設置：1mの間隔の座席とアクリル板使用

(4)手指消毒

ウィル・ステラ（アルコール・噴霧付き） 24本用意

手指消毒後会場に入る

(5)機材消毒

サテライト除菌クロス 250枚容器 6個用意 機材及び椅子の消毒

マイクの共有は避けて1名につき1本使用

(6)換気

窓の開放

全ての人のマスク着用の徹底

(7)車椅子 事前に連絡者

駅までの送迎と座席への案内

車椅子席はテーピングをして迷わないよう工夫

(8)トイレの明示と案内（無駄な動きを省く）

\* 実施から2週間体調不良の連絡をチェックしたが、体調不良の連絡はなかった。忘れ物2件のみの連絡であった。